様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月 １２ 日現在

機関番号：２３９０３
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2015～2016
課題番号：１５Ｋ１２８５１

研究課題名（和文）キリシタン文学における日本古典文学の受容と影響をめぐる比較説話学的研究

研究課題名（英文）The Reception and Influence of Classical Japanese Literature within Christian Writings: A Comparison of Narrative Tales

研究代表者
土屋　有里子（YURIKO, TSUCHIYA）

名古屋市立大学・大学院人間文化研究科・准教授

研究者番号：７０３３９６２０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,600,000円

研究成果の概要（和文）：1591年に日本で刊行された『サントスのご作業』は、ヨーロッパの聖人伝を翻訳したものである。その翻訳に際しては、日本古典文学で使用されている古語や仏教語が使用されており、宣教師たちが、日本語学習や文化理解にあたり、どのような文献を参照していたかを知る大きな材料となる。本研究ではこの翻訳状況の精査を基軸として、日本古典文学がキリシタン文学成立に及ぼした影響を考察した。同時に、当時の宣教師たちの実態を文献講読以外から解明するため、マカオ、ポルトガルへの海外調査や天草、長崎等での実地踏査を行った。言葉の問題と当時の人々の精神性の両面から、殉教の書である『サントスのご作業』を考察することが出来た。

研究成果の概要（英文）：Published in Japan in 1591, Santos no Gosagyo is a Japanese translation of the biographies of European saints. The work includes old Japanese words and Buddhist terms that are found in classical Japanese literary texts, and thereby serves as a valuable resource for detailing what sources the missionaries relied upon for studying the Japanese language and understanding Japanese culture. Based on a careful investigation of this translation, the project considers the influence of classical Japanese literature on the formation of Christian literature in Japan. In addition, in order to elucidate the sources of the missionaries' understanding apart from these texts, I travelled to Macau, Portugal, Amakusa, and Nagasaki for fieldwork. Through an investigation of this book of martyrs , Santos no Gosagyo, I was able to draw conclusions about both the problem of language as well as contemporaneous spirituality.

研究分野：日本中世文学・説話文学・キリシタン文学

キーワード：キリシタン文学　サントスのご作業　フランシスコ伝　聖人伝　説話文学

１．研究開始当初の背景
(1)これまでキリシタン文学研究は、宣教師による辞書の編纂等への関心が強いことから、主に日本語学の分野で進められてきたおり、日本文学の中では、未だ異端視される傾向がある。ただその中で米井力也氏による、表現と翻訳に焦点を絞った先駆的な文学研究が生まれたが、氏の早すぎる逝去により、頓挫を余儀なくされている。日本と西洋が初めて出会った時期の文学表現を鮮やかに遺すキリシタン文学は、日本文学の側からの研究が急務であり、そこには日本文学を世界文学の中で捉えるための大きな意義と将来性がある。

(2)申請者はこれまで主に日本の仏教説話文学研究を行ってきた。その中で、宣教師たちが布教の手段として、日本人の言葉や伝統を学ぶ一助とするために、日本文学、その中でも当時一大対抗勢力であった仏教を説く仏教説話文学を学んでいたことが分かった。日本文学の中では未だ異端視されることも多いキリシタン文学であるが、その内容の正当な考察と意義づけは必ず行われなければならない。本研究はそういった着想と成果の延長線上にあるものである。

２．研究の目的
本研究は、日本中世末期からキリスト教の宣教師たちによって作られたキリシタン文学を対象とするものであり、以下の点を研究の主たる目的とする。
(1)キリシタン文学における日本古典文学の影響を用語、表現、典拠、思想の面から多角的に考察し、日本人に受け入れやすくするために改変された表現の特徴と多用された仏教語の実態を明らかにする。

(2)キリシタン文学と日本古典文学に共通する説話的モチーフについて、〈聖人伝〉を中心として比較説話学的アプローチを試み、東西の説話の伝播過程を解明する一助とする。
(3)従来等閑視されてきたキリシタン文学について、日本文学の中に定位置を築く。

３．研究の方法
(1)キリシタン文学における日本古典文学の受容を典拠、仏教語に留意しつつ考察する。

(2)キリシタン文学の聖人伝である『サントスの御作業』と西欧の代表的な聖人伝である『黄金伝説』等の比較検討から、布教の為に日本化した内容と表現を集成する。

(3)キリシタン文学と日本古典文学に共通する説話的モチーフについて両者を比較し，其の淵源であるインドの経典由来の説話等も視野に入れつつ、東西説話の伝播の実態と比較考察を行う。

(4)西欧と日本の思想的差異として顕著な〈死〉の表現に着目し，布教の為に日本化した思想的問題を探る。その折には単なる文学表現の比較検討ではなく、双方の地獄図や天国図の絵解きにも着目する。

４．研究成果
(1)研究の主な成果
①　『サントスのご作業』源代誤訳
　日本中世末期から、キリスト教の宣教師たちによって作られたキリシタン文学について、聖人伝の翻訳の問題を中心として考察を行った。『サントスのご作業』は従来、ヨーロッパで爆発的な人気をもった『黄金伝説』との内容比較がなされることが多かったが、実際の翻訳には日本古典文学や仏教語の表現が多く使用されているため、一語一語丁寧に先行作品との比較検討を行い、源代誤訳を行っている。
　ただその際、『サントスのご作業』自体が二種類の伝本（マヌエル・バレト写本と島原加津佐で印刷されたキリシタン版）を持つことから、まずはキリシタン版を考察対象に定めた。キリシタン版とバレト写本では、収録する話数自体が異なり、どちらか一方にしかない話も多くある。そのため、キリシタン版にのみある話、反対にバレト写本にはあるのにキリシタン版にはない話を抽出して集中的に検討していくことが、まずは全体の傾向をつかむために有用と判断した。
　以上の基本方針に基づき、研究期間開始時より、キリシタン版『サントスのご作業』の現代語訳を開始した。中でもまずは宗派を超えてキリスト教徒の中で聖人としてあがめられ、イエズス会においても大きな尊崇を集めていたアッシジの聖フランシスコ伝について現代語訳を行った。その成果は２回に分けて『人間文化研究』に発表した。

②　実地踏査の成果
〔マカオ調査〕
　徳川時代、日本において禁教令が発令され、国内におけるキリスト教弾圧が特に激しくなって以後、多くの宣教師や日本人キリスト者たち（キリシタン）がマカオに逃れた。マカオはもともと、イエズス会の東洋における布教の根拠地であったこともあり、イエズス会本来の遺構と、キリシタンの遺物が豊富に残されている。
　今回の調査ではまず、マカオにおけるキリスト教遺産の代表である聖ポール天主堂跡、天主教芸術博物館および地下納骨堂を訪れた。聖ポール天主堂は二度の火災により焼失し、現在ファサードのみが残されている。そのファサードは１６４０年代に建築されたものであり、その彫刻はスピノラの指揮のもと、日本人も関与して作られたものである。中央の、マリアに踏みつけられている七つの頭を持つ悪魔は、徳川家康を象徴しているとも言われ、その寓意性はキリシタン文学にお

ける表現の問題と密接な関係を持つことが確認できた。また博物館の遺物には貴重な資料が集められており、マカオにおけるキリスト教布教の実態を知ることができた。

その他に、マカオ博物館、マカオ海事博物館に赴き、日本とマカオの深いつながりを再確認した。数多くの教会を訪れたが、中でも聖ヨセフ教会において、フランシスコ・ザビエルの上腕骨（現物）を確認することができたこと、聖ドミンゴ教会の博物館で蛇を踏むマリア像を確認できたことは特筆される。ただ予定していたコロアネ島の調査が時間の都合で果たせなかったため、近々再訪する必要性を残した。

〔ポルトガル調査〕

日本に残るキリシタン文学の作成には、ポルトガル人宣教師が大きく関与している。今回はポルトガルに残る日本キリシタン関連の資料や遺産の踏査を行った。

まずポルトではカテドラルとサン・フランシスコ教会を調査した。特に後者に残る『モロッコ殉教の五聖人』の彫刻の上にある『日本二十六聖人の殉教』では、八人が彫られている。二十六聖人のうち、明確にフランシスコ会所属の聖人は六人であるため、残る二人が誰であるのか、即断はできないが、仮説のもととなる貴重な資料を入手することが出来た。

リスボンで特筆すべきは、天正遣欧使節団が訪問したサン・ロケ教会である。外観からは想像できないが、内部にはきらびやかな複数の黄金祭壇がある。隣接する美術館には予想以上に 16 世紀の遺物が残されていた。また国立古美術館では、日本由来の南蛮美術と、キリスト教的他界観を示す絵画作品を確認した。ベレンにある海洋博物館では、日本とポルトガルの交流を示す遺物が残されており、その中にザビエルの事績を伝える二つの絵画を確認することが出来たのは、望外の収穫であった。

エヴォラでは、天正遣欧使節団が滞在した街であり、使節団の少年が実際に演奏したパイプオルガンを持つ大聖堂を訪れた。隣接する美術館には多数の 16 世紀遺物が残されていた。またエヴォラ美術館において、16 世紀の聖人画等を確認することが出来、エヴォラ全体として、良質な資料を収集することができた。ただ今回は時間の都合で、エヴォラの先にあるヴィラ・ヴィソーザに行けなかったことが悔やまれる。ヴィラ・ヴィソーザはブラガンサ公爵家ゆかりの地であり、近年、この図書館から天正遣欧少年使節団に関わる貴重な新資料が発見された。ブランガンサ家図書館以外にも、エヴォラ大学図書館やマフラ国立図書館には 16 世紀の日本に関わる資料が所蔵されているため、将来的に再訪する大きな必要性を感じた。

〔長崎・平戸調査〕

キリシタン遺物を多く遺している、長崎と平戸に資料収集に赴いた。まず平戸においては、田平教会、宝亀教会、紐差教会、平戸ザビエル教会を実地踏査した。また近年までかくれキリシタンが存在していた生月島において、資料館を訪れ、仏教や神道の思想が混在した独自のキリスト教信仰の実態を調査出来たことは大きな成果であった。

長崎ではまず二十六聖人記念館において、キリシタン関連の一級資料の数々を調査することが出来た。大浦天主堂附属のキリシタン資料館での調査とあわせて、キリシタン文学に流れる当時の信仰の様相や意識を、様々な資料から裏付けることができ、大きな収穫をえた。また潜伏キリシタンの里として有名な外海地方に実地踏査を行い、出津文化村としてまとまっている出津教会、旧出津救助院、外海歴史資料館にて調査を行った。出津文化村は「３、研究の方法(4)」に記したところの、西欧と日本の〈死〉の表現を考察するために有力な資料となる「ド・ロ版画」を遺したド・ロ神父ゆかりの場所であり、世界遺産候補地でもある。６種類残る、キリスト教的世界観を保ちつつも日本化された「ド・ロ版画」の実物を確認し、資料収集ができたことは、今後の研究に大いに役立つものとなった。

(2)国内外における位置づけとインパクト

キリシタン文学は「１．研究開始当初の背景」に記したように、日本文学内においては研究対象としてこれまで等閑視されてきた分野である。それを従来、仏教文学研究者として認知されてきた研究代表者が行うこと自体、大変な驚きを持たれた。日本文学外においても、日本におけるキリスト教研究者でさえ、『サントスのご作業』のようなキリシタン文学を知らない人が多くおり、その存在を知らしめたことだけでもある意味衝撃を与えることとなった。

加えて、当時のキリシタン文学の作成に、日本の古典文学や仏教語が使用されてきたことは、キリシタン文学は西欧言語と漢語との接触の中で生まれた、という立場の研究者に対して、従来の考え方の修正を迫るものとなった。

いずれにせよ、キリシタン文学というジャンルを日本文学、特に日本中世文学の中に位置づけ、研究対象として認知すべきことを、少なからず提唱することが出来たと考えている。

(3)今後の展望

今回の研究で、『サントスのご作業』の現代語訳に着手し、キリシタン関連各地の実地踏査を行うことが出来たが、２年間という研究期間の短さもあり、十分な成果を上げるまでに至らなかったのが悔やまれる。『サントスのご作業』については、全体の現代語訳を考えており、将来的に書籍として出版することを目指している。そうして全体像が示され

ることにより、キリシタン文学の内容がより詳細に、わかりやすく理解され、認知度が上がることを期待している。現代語訳と同時に、各論として、それぞれの聖人伝が西欧のどのような本説に基づき作られたのかの検討を経てこそ、東西の説話文学比較の域まで踏み込めるのであるが、今回の研究では到底そこまでは及ばなかった。今後は各論としての論文発表も精力的に行うつもりである。

また「ド・ロ版画」を対象としての、〈死〉の表象をめぐる日欧比較も、研究の重要なテーマであり、キリシタン文学の殉教に関する表現分析とあわせて、今後も追求し続けていきたい。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）

1. 土屋有里子、無住直筆『置文』・『夢想事』再考、説話文学研究、査読有、52 号、2017 年刊行予定
2. 土屋有里子、『サントスのご作業』における聖フランシスコ伝―源代誤訳②、人間文化研究、査読無、27 号、2017 年、p281-286
3. 土屋有里子、『サントスのご作業』における聖フランシスコ伝―源代誤訳①、人間文化研究、査読無、26 号、2016 年、p149-157

〔学会発表〕（計２件）

1. 土屋有里子、無住直筆『置文』・『夢想事』再考、説話文学会、2016 年 9 月 24 日、名古屋市立大学（愛知県名古屋市）
2. 土屋有里子、死生学の可能性－過去の探究から未来の創造へ－、名古屋市立大学死生学シンポジウム、2016 年 12 月 18 日、名古屋市立大学（愛知県名古屋市）

〔図書〕（計０件）

〔その他〕

特になし

６．研究組織

(1)研究代表者

土屋有里子（YURIKO, Tsuchiya）

名古屋市立大学・大学院人間文化研究科・准教授

研究者番号：70339620

(2)研究分担者

（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者

（　　）

研究者番号：

(4)研究協力者

（　　）